

# 平成27年度国際看護研修報告書

武 田 藍 白 井 美帆子 島 田 将 夫  
上 田 佳余子 内 田 優 子 金 井 Pak 雅 子

## I. 国際看護研修概要

### 1. 国際看護研修達成目標

事前学習レポートとシンガポールでの看護研修に参加することを通じて、看護教育制度、保健医療制度、文化、価値観と看護実践との関連について学習する。さらに、その国の保健医療の課題とそれに対する政策について理解を深め、下記の3項目について説明できるようになる。

- A) 世界のヘルスケアの状況
- B) シンガポールのヘルスケアシステム
- C) シンガポールのヘルスケアシステムと日本のヘルスケアシステムとの類似点および相違点についての比較分析

### 2. 研修目的

- ①シンガポールの保健医療システムを知る。
- ②シンガポールの看護教育システムを知る。
- ③シンガポール国立大学看護学部との学生との交流を図る。
- ④シンガポールの病院の現状を知る。

### 3. 研修期間

平成28年2月28日～3月6日（内、研修は5日間）

### 4. 研修内容及びスケジュール

シンガポール国立大学（National University of Singapore：以下 NUS とする）の国際交流委員である Elaine Lee 教授とコーディネーターの Siti Kamaliah 氏と本学の国際交流委員でプログラムの検討を行った。調整中の段階では、今までのプログラムにもあった NUS での演習見学、附属病院を始めとする複数の病院見学が盛り込まれたプログラムを、NUS の国際交流担当者が計画してくださっていた。それに加えて、シンガポールにおけるヘルスケアシステムについての講義と、病院で学生にシャドーイングをさせて頂けないかという要望を、Elaine Lee 教授とコーディネーターの Siti Kamaliah 氏に伝えた。すると、迅速にこちらの希望を取り入れたプログラムを調整してくださり、表1に示したプログラムが出来上がった。

### 5. 平成27年度国際看護研修参加者

【東京有明医療大学 看護学部 看護学科】

武田 凜花（3年）・安田 由美（3年）・近野 明日香（2年）

【東京有明医療大学 看護学部 看護学科 引率教員】

白井 美帆子・武田 藍

表1 NUS 研修プログラム

Date	Morning Activities	Afternoon Activities
28 February Sunday	Departure 10:50 Tokyo/Haneda JL037 Arrival 17:30 Singapore/Changi	
29 February Monday	10.30am - 11.00am Welcome Orientation 11.00am - 11.30am Briefing on Singapore Healthcare System Associate Professor Chow Yeow Leng, Director of Education	2.30pm - 3.00pm Visit to the Centre for Healthcare Simulation 3.00pm - 3.30pm Visit to the Medical Library
1 March Tuesday	10.00am - 12.00pm (Tutorial) NUR2116 Medical/Surgical II	2.00pm - 4.00pm (Lab) NUR1119 Medical/Surgical I
2 March Wednesday	9.00am - 11.00am Visit to Ng Teng Fong General Hospital	2.30pm - 4.30pm Visit to Dover Park Hospice
3 March Thursday	9.00am - 11.00am Shadowing at Oncology Nursing Ward in NUH Medical Centre	2.30pm - 4.30pm Visit to Raffles Hospital
4 March Friday	11.00am - 12.00pm Debrief	Activities led by student buddies
5 March Saturday	Activities led by student buddies Departure 22:00 Singapore/Changi JL036	
6 March Sunday	Arrival 05:35 Tokyo/Haneda	

## II. 研修内容

### NUS 研修1日目：2016年2月29日

#### 【オリエンテーション：シンガポール国立大学と看護学科について】

国際交流委員の Elaine Lee 教授, Chow Yeow Leng 教授, Siti Kamaliah 氏が迎えて下さり, Elaine Lee 教授からご挨拶を頂いた (写真2)。

1980年に創立された NUS は, 11学部の教育を3つのキャンパスで行っており, 約3万人の学生が学んでいる。多民族国家であるシンガポールの国の特徴と通じるように, NUS も100か国以上の留学生を受け入れており, 国際色豊かな大学である。

広大な NUS の敷地の中の YONG LOO LIN SCHOOL OF MEDICINE の一角に ALICE LEE CENTRE FOR NURSING STUDIES (以下 ALCNS とする) の敷地がある。つまり, 総合大学の中に医学部があり, その中に看護学科があるという位置づけは日本と同じである。YONG LOO LIN SCHOOL OF MEDICINE も ALCNS も設立の際, 出資後援者の名前を残し, 敬意を表しているようだ。我々の宿泊先として提供された大学の寮は正門の近くに位置しており, 看護学科はセントリッジという大学と国立病院が隣接している駅の近くにあるため, 同じ敷地内でもバスで15分程かかる距離であった。Siti Kamaliah 氏が広大な敷地内の移動に慣れない我々のために, 鉄道と校内のバスマップの詳細のプリントを用意してくださった。ALCNS は3年制の教育課程で学士 (Bachelor of Science in Nursing: 以下 BSN とする) を授与している教育機関である。更に, ALCNS の学生は看護師国家試験を免除され, 卒業と同時に看護師免許を取得することができる。また, 希望者は更に1年の研究課程に進学することができ, BSN with honor (名誉学士) の学位が授与される。

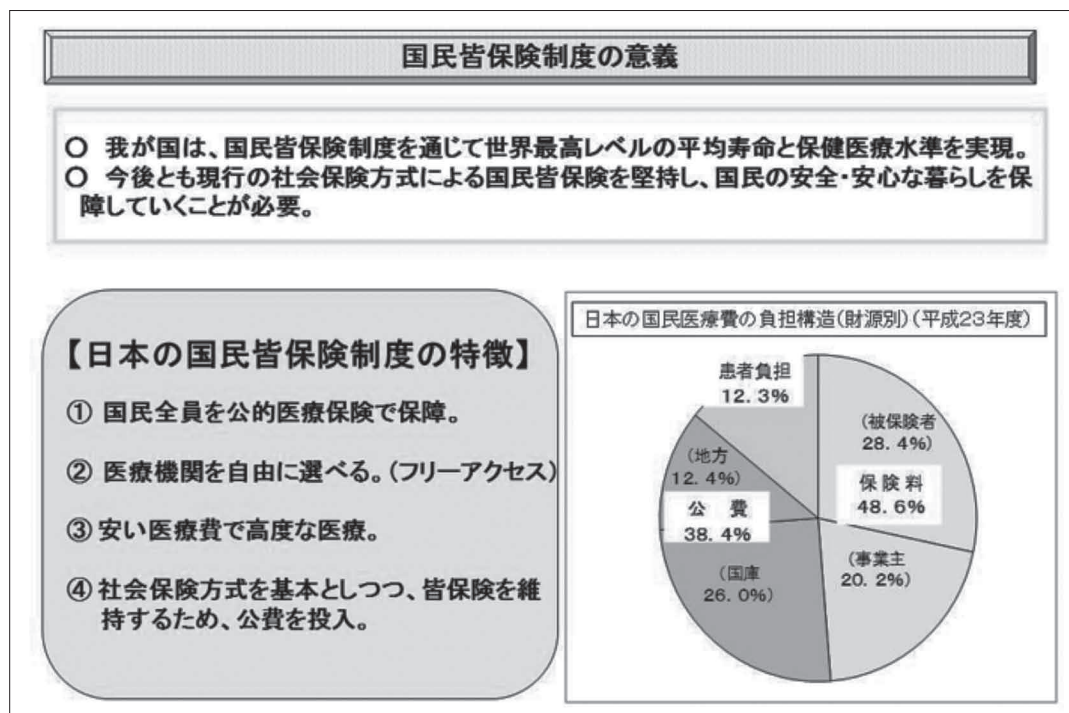
#### 【シンガポールのヘルスケアシステム】

オリエンテーションに続き, Chow Yeow Leng 准教授よりシンガポールのヘルスケアシステムについて講義をして

頂くことができた。シンガポールも平均寿命が伸びてきており急激な高齢化、慢性疾患の増加、認知症の増加が予測され、対応が急がれている。また死因のトップ3である、癌、肺炎、心疾患も日本と同様である。このようにシンガポールの社会構造、医療の抱えている課題は、日本と類似している。それにも関わらず、ヘルスケアシステムは日本とは異なっており、どちらのシステムでも両国の抱える課題に対応できるのか非常に興味深い内容であった。

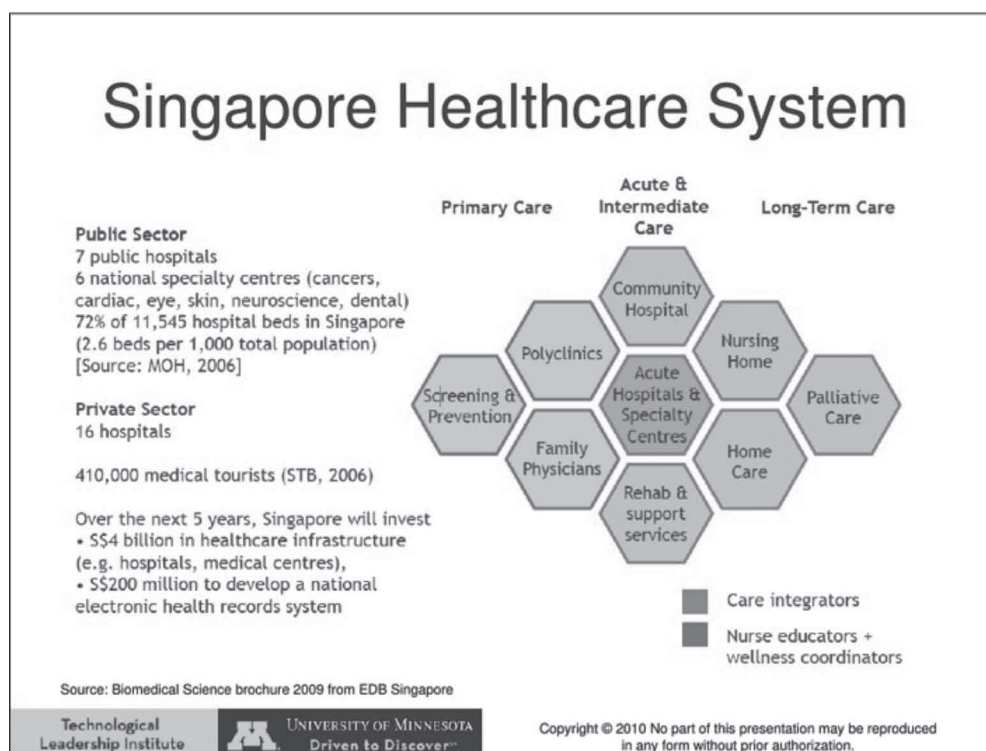
我が国の国民皆保険制度の特徴を表2<sup>1)</sup>に、シンガポールのヘルスケアシステムの特徴を表3<sup>2)</sup>に示した。

表2 我が国の皆保険制度



文献1)より転載

表3 シンガポールのヘルスケアシステム



文献2)より転載

両国のヘルスケアシステムの特徴の中の一つの違いは、特別な申請がない限り医療費が誰でも一律の日本に比べ、シンガポールは収入によって医療費が変化することである。低所得者の方が政府からの援助をより多く受けることができるが、それによって皆が同じ療養環境というわけではない。入院できる病室や設備は収入のランクによって異なり、政府からの医療費の援助の少ない者は個室や2人部屋でエアコン付きであるのに比べ、援助の多い者は4人部屋や6人部屋でエアコンの代わりに扇風機しかない。つまり、受けられる援助が多く自己負担額が少ない分、安楽に関わるような、医療に影響の少ないと考えられる部分のコストを極力削ることで、医療費が安くなるようになっていた。しかし、受ける医療や医療の質は、影響されないということである。

シンガポールでは医師は General Practitioner（以下 GP とする）と呼ばれる一般医と、Specialist と呼ばれる専門医に分かれている。シンガポールでは最寄りの GP クリニックに相談し、検査や専門的な治療が必要な場合、大きな総合病院や医療センターを紹介されているのが一般的であるそうだが、最初から総合病院や医療センターを受診することもできる。しかし、問題はこの病院の数である。東京都23区ほどの大きさしかない国ではあるが、表3に示した通り公立の総合病院7つ、国立の皮膚科、眼科、歯科などの専門領域を扱う医療センターが6つしかない。このままでは高齢化への対応が困難であるということで、地域医療を担う GP クリニックの開業を政府が促している。

### 【ALCNS 見学】

演習室では、早速シミュレーション人形4体が出迎えてくれた（写真3）。本学にあるシミュレーション人形と同様に血圧、脈拍、呼吸数が測定できるものであった。また、演習室の壁にはマジックミラーが付いており、演習室の隣にある部屋から教員が、学生の演習している姿を見たり、バイタルサインの設定を変えたり、マイクを通じて人形になりきって会話することが可能であった。

本学にはないものとして、人工肛門の人形を教材に使用していた（写真4）。人工の糞便は何種類もの穀物や野菜などから作成し、見た目も臭いも本物によく似た排泄物を実際にパウチの中に収納してパウチ交換の練習を行っているとのことだった。また、医学生への麻酔の演習のための手術室があり（写真5）、看護学生も手術前後の手順のシミュレーションや機械出しの練習を行っているそうで、技術演習の多様性と専門性の高さに思わず目を見張った。

最後に訪れた図書館では、整った警備体制のもと、学生のために自習室エリアが24時間開放されている。日本ではほとんど実施されていないサービスではあるが、NUS では学生のニーズがあることが分かった。

## NUS 研修2日目：2016年3月1日

### 【演習見学・カリキュラムについて】

2日目の午前中は2年生の外科演習、午後は1年生の外科演習を見学させて頂くことができた。2年生は人工肛門のパウチ交換、6針創の抜糸、膀胱留置カテーテル挿入、点滴のミキシングと投与の4事例を順番に行っていた。1年生は点滴のミキシングと投与2事例、皮下注射、筋肉注射の4事例から2事例を割り当てられ、練習していた。重複した内容があるのは、1年生と2年生の間でカリキュラムを変更しているためである。

1年生のカリキュラム変更内容について尋ねてみると、モジュール型と言われている、1つのシステム（心臓、肺、腎臓など）に対し1週間で、解剖生理、病態、理論、必要な処置と手順を学び、そして最後に実際に演習をする形式になったそうである。本学は1年生で解剖生理、病態、2年生で各領域の対象者の特徴、理論、看護過程、3年生で事例と演習という形をとっており、それぞれの授業で学んだ知識がバラバラになり繋がりにくいという問題点があるが、それをモジュール型にすることで解決を試みているようである。来年以降、モジュール型カリキュラムの成果と問題点について尋ねてみたいと考えている。

演習の進め方は、約15名の学生を5名ずつ4グループに分け、学生同士でディスカッションをしながら演習を進めていた。前日までの学習内容が沢山書き込まれたプリントを見ながら、机上で得た知識と実践の融合を学生たちで行っている姿を見ることができた。自分自身の経験であるが、学生時代に得た机上の知識と実践の融合をしたのは、看護師1年目で入職後であった。「看護は学校で学ぶのではなく、現場で学ぶ現場教育だ。学校で学んだことと、現場にギャップがあることを、まず知って欲しい。」と、病棟配属1日目のオリエンテーションで教育担当の先輩ナースに言われ、衝撃を受けたことを今でも覚えている。しかし、NUS では大学にして、しかも3年過程で、1年生から、学生が知識と実践の融合を行うことを可能にする機会を与えている。モジュール型カリキュラムは、まだ本当に新しい試みで、問題点などが分からない状態ではあるが、これを可能にするのであれば、日本でも取り入れていく価値があるのではないだろうか。



**NUS 研修3日目：2016年3月2日****【Ng Teng Fong General Hospital 見学】**

Ng Teng Fong General Hospital（ン・テン・フォン総合病院、写真7）は、新築で高層の3つの建物からなる病床数700床の大きな私立の総合病院であった。先述した通り、シンガポールでは患者は好きな時に好きな病院を受診することができる。それを可能にしているのは、患者情報の管理が全国的に統一されているシステムである。そのため、患者がセカンドオピニオンを希望している場合や、リハビリ病院、ホスピスなどへの転院の際も、新しい病院でもすぐに患者情報を閲覧することが出来るため、医療者の業務が効率化され、患者も気兼ねなく病院を変更できる印象を受けた。その反面、先に述べたように日本に比べかなり少ない病院数ではあるが、「選ばれる病院」になるために様々な工夫されていることを、見学を通して感じた。例えば、三角形の様な部屋の中央が一番奥まっている部屋の作りになっており、6人部屋でも全員が窓際になることで開放感が得られるだけでなく、飛沫感染予防になるよう工夫されていた。また、建物内に庭園が何カ所も設置され、外の景色を楽しめるようになっていたり、ICUは全て個室で各部屋の壁に絵が描かれていたり（写真9）、患者がリラックスして過ごせるような環境になるような工夫がされていた。

また、医療職の業務を効率化するための工夫も最先端であった。ITシステムが様々な所に導入され、ベッドネームには患者の話す言語やアレルギーが表示されていたり、日本でも進んでいる記録の電子化は入力と閲覧がいつでもどこでも行える利点がある。物品管理、入退室管理もコンピューターが自動で行い、更に、配膳車は自動操縦システムにて病棟・調理室間を行き来していた（写真10）。それでも看護師の人員配置は病棟により多少異なるが6-12人の患者に1人の看護師が配置されており、日本と同じである。全てをロボット化することに賛成というわけではないが、患者の安全性と医療者の業務の効率性の向上を図る上で、「業務」に追われずに「看護」を提供できる時間と設備が整えられているに越したことはない。

**【Dover Park Hospice 見学】**

Dover Park Hospice はホスピスの先駆けとして活動を始めたメンバーにより、1992年に創立された。自然に囲まれた穏やかに過ごせる場所になるよう、設計からこだわり、職員の方々の思いが込められた病床数50床の建物であった。高齢化を迎え、慢性疾患の増加が見込まれているシンガポールでは、ホスピスの需要も急激に高まっている。そのため、病床数を100床に造設・移転するため、今の建物は取り壊しが決定しているとのことである。庭や鯉のいる池は日本人にも馴染みが深く、取り壊しが惜しまれる建物である（写真11-13）。何より、そのことを残念そうに語る職員の方の表情や言葉から、このホスピスへの強い思い入れを感じた。

入院している患者の91%が余命3か月以内の宣告を受けており、症状に対する緩和ケア、心理・社会的な問題に対するメンタルケアを受けている。そのケアの大部分を担っているのが、ボランティアである。音楽療法、マッサージ、アニマルセラピー、芸術療法など、様々な代替療法を提供するために沢山のボランティアが訪れていた。医師や看護師も休日にボランティアとして参加していることもあるそうだ。診療医療費の徴収と政府からの資金や支援だけでは財政的に厳しく、25%は寄付で賄われているというホスピスト、入院患者をこんなにも沢山の人が寄付やケアで支えている現状を見ることができ、胸がいっぱいになった。

最期を看取る家族が休むための部屋も用意されていた。そこには小さな子供でも死が理解できるよう、「死」についての絵本が沢山置かれていた。また、多民族国家であるシンガポールには、多様な宗教的背景の患者が入院している。お祈りのために用意された部屋には、イスラム教、キリスト教、仏教、ヒンドゥー教など主要な宗教に対応可能な道具や経典が取り揃えられており、終末期における宗教的な配慮もなされていた。

**NUS 研修4日目：2016年3月3日****【National University Hospital 見学・シャドーイング】**

National University Hospital（以下 NUH とする）は国立大学病院、つまり NUS の附属病院であり、同じ敷地内にある。1986年創立、病床数1,160床の大きな病院である。2013年に増築された新棟には、患者が自分で自分の病気になる情報を調べられるよう配慮した PC と資料、書籍があるリソースセンターがあり、自由に使えるよう解放されていた。また、ヨガスタジオ、治療室、在宅から電話で相談を受けるスタッフが在中しているサポートセンターなど、日本ではまだ馴染みのない設備を見せて頂くことができた。

見学の後は、学生のみ化学療法外来でシャドーイングを実施した。看護師1名に対して学生を1名配置して頂き、看護師の動きや患者への接し方、患者の反応を見ることができたようだ。化学療法外来では、治療のために毎日約100人が来院するため、看護師は慌ただしく動き回っていたのが印象的だったと学生たちは話していた（写真14）。また、TV とリクライニングソファがあるブースが6つあり、患者は1名につき1ブースを割り当てられる。その中で5-6時間



写真1 桜井理事長にお見送り頂き、羽田空港を出発



写真2 ALCNSでLeng准教授、Kamaliahコーディネーターと



写真3 シミュレーション人形4体がお出迎え



写真4 人工肛門とパウチ。演習時はここにリアルな人工便が入る



写真5 手術演習室



写真6 演習を見せてくださった1年生と教員，見学に来ていた中国の大学教員と



写真7 Ng Teng Fong 総合病院にて



写真8 看護部長さんより医療と病院の概要をレクチャー頂いた



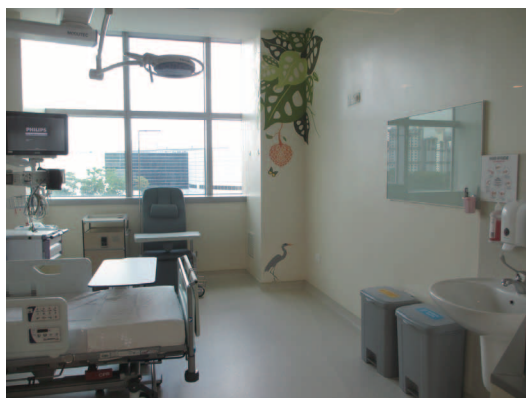


写真9 完全個室のICU  
壁画も部屋によって異なっている



写真10 自動配膳車  
自動でエレベーターにも乗る



写真11 Dover Park Hospice の前で



写真12 ホスピスの周りは  
自然がいっぱい



写真13 池のある中庭



写真14 シャドーイングの感想を話す学生たち



写真15 Raffles Hospital の外観と入口にいるコンシェルジュ



写真16 修了書とケーキを頂いた



写真17 学生達と遊んでくれた NUS のバディが空港に見送りに  
来てくれた

かかる化学療法を受けながら、テレビを見たり、1名まで付き添える家族と会話をしたり、とてもリラックスして過ごしており、患者の安楽に配慮された設備に感動したようであった。

#### 【Raffles Hospital 見学】

新築したばかりの100%自費診療というランドマークタワーの私立病院を見学させて頂いた(写真15)。Raffles グループはシンガポールに本社を構え、中国(香港、上海)、日本(大阪)、ベトナムに病院を持っており、病院だけでなく、保険事業、健康食品事業、治験、研究所も手掛けている。一般科、救急外来もある総合病院であるが、空港とも提携した渡航者外来やジャパニーズ・クリニックが病院内に併設されているため、患者全体の45%が外国人であった。

ジャパニーズ・クリニックは日本人の医療従事者が働いているため、日本人旅行者やシンガポール在住の日本人が、言葉の心配をせずに受診でき、安心して入院や出産などができるようになっていた。

#### NUS 研修最終日：2016年3月4日

##### 【振り返りと修了書授与式】

最終日は NUS に戻り、学生たちは NUS の国際交流担当の先生方に本研修の学びと感想について英語でスピーチを行った。学生たちは、見学した2年生の演習科目で行われていた処置が専門的であったこと、日本と社会的側面が酷似しているのにも関わらず、ヘルスケアシステムが大きく異なっていることなど、それぞれの印象に残ったことと、この研修で学び、成長できたことに対し、感謝を述べていた。NUS の教員より修了書が一人ひとりに授与され、ケーキまで用意して頂き、学生たち、本学の教員と NUS の教員の交流を深めることができた会となった(写真16)。

### Ⅲ. ま と め

約1週間の短い研修ではあったが、学生たちの最後のスピーチからもわかるように、研修の目的であったシンガポールのヘルスケアシステムを理解し、病院と収入のグレードによって療養環境と自己負担額が大きく異なるという、日本との相違点についても理解を深められたようであった。従って、研修の目的は達成できたと考える。更に、学生たちに大きな変化も見られた。研修が始まった頃は、緊張した面持ちで質問や意見を言うことがなかったが、シャドーイングが終わると積極的に自分の口から英語で感想を述べ、英語で言えない部分は日本語で教員に助けを求めることができていた。その積極的に学ぼうとする力や、看護や医療に興味や面白さを感じられたことこそが、これからの看護を担っていく者にとって一番必要な能力であり、学生たちにとって今回の研修で大きな収穫となっていることを願っている。

#### 謝 辞

実りある研修をコーディネートし、受け入れて下さった NUS の国際交流担当の先生方とコーディネーターの方々、見学を受け入れて下さった各病院の責任者、スタッフの皆様、お忙しい中シャドーイングを受け入れて下さった NUH 化学療法外来の師長様、スタッフの皆様、心より感謝申し上げます。

また、NUS 研修をご支援頂きました、東京有明医療大学の看護学科教員の皆様、事務局職員の皆様にも、この場をお借りし、深謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 厚生労働省 [internet]. 厚生労働省我が国の医療保険について. [http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryoku/iryohoken/iryohoken01/index.html](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryoku/iryohoken/iryohoken01/index.html). [accessed 2016-8-2]
- 2) Slide Share [internet]. University of Minnesota. Minnesota Opportunities in Singapore and Vietnam. <http://www.slideshare.net/JeromeHarrison/university-of-minnesota-mot-graduate-program>. [accessed 2016-8-2]